様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３８０７１８

研究課題名（和文）現代社会における老いをめぐる社会構想の編成に関する研究

研究課題名（英文）The Transformation of Social Concepts for Aging Society; Security, Distribution and Social thought in Modern Societies

研究代表者
天田　城介（Amada, Josuke）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：７０３２８９８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の研究成果として、第一に、文献調査ならびにフィールドワークを通じて、戦後日本社会における老いをめぐる社会構想をめぐる現代史を描くことができたことである。これによって戦後日本社会における高齢化と高齢者政策をめぐる歴史的ダイナミズムを示すことができた。第二に、そうした知見を具体的な成果として発表した。平成25年度から平成29年度の5年間において、天田城介・渡辺克典編『大震災の生存学』（青弓社、2015年10月）を刊行した。その他にも、共著・分担執筆の論文は10本、学術論文20本以上、書評・シンポジウム記録・その他が20本以上にもなり、この5年間で圧倒的な成果をおさめた。

研究成果の概要（英文）：　As the research achievements, first the project successfully depicted the modern history of aging in the post world war 2 society in Japan. As the result, the historical dynamism related to aging and social policies in Japanese society after the world war 2 was clearly presented. Second achievement is the publications of such knowledge as books and journals. During five years between 2013FY and 2017FY, one co-edited book, "Forms of Human Life and Survival under Megathrust earthquake", were published. In addition to that, more than 10 papers were co-authored, more than 20 academic journals were published, and more than 10 other articles like reviews and symposium proceedings were written.

研究分野：社会学

キーワード：高齢化　社会政策　社会保障　戦後日本型生存保障システム　世代間関係　分配　東アジア　歴史社会学

１．研究開始当初の背景

高齢者政策の緻密な解読を通して社会保障制度がいかに変容してきたのかを解明する作業は、これまでの研究において医療保険・年金保険・高齢者福祉・介護保険・税制（老年者控除等を含む）など主題別ないしは領域別に研究が重ねられており、戦後日本社会において老いをめぐる歴史と政策がいかなる変容を遂げてきたのかという観点から分析されることはなかった。言わば、個別の主題に関する歴史や制度や運用ないしは今後の政策的提言に関しては多くの研究が行われてきたが、その少子高齢化社会における老いをめぐる歴史的ダイナミズムが描出されることはなかったのである。

加えて、そのような老いをめぐる歴史的ダイナミズムのもと、親子間・家族間・世代間に生じている現実を踏まえ家族をめぐる不平等がいかに語られてきたのか、そのことで世代間分配の有り様はいかに形づくられているのかを明示する作業はほぼ皆無であった。とりわけ、戦後日本における歴史的・時代的文脈のもと高齢者を含んだ親子間関係・家族間関係・世代間関係がいかに変容してきたのかの詳細な分析はなされていない。

更には、1970 年代以降の少子高齢化の進展において、更には 2000 年代以降の超高齢化／人口減少のもとどのような時代精神が形成されてきたのかについての現代史が描出されることはなかった。

以上の 3 点の課題を同時に達成しつつ、老いをめぐる現代史を緻密かつ詳細に分析することを通じて、《現代社会における老いをめぐる社会構想の編成》を提示することを本研究の最大の狙いとする。

２．研究の目的

本研究は、戦後日本社会における高齢者政策を中軸とした社会保障制度の歴史的変容を解読しつつ、東アジア諸国との国際比較分析を実施することを通じて、【1】戦後日本型生存保障システムの変容、【2】現代社会における世代間関係・世代間分配の変容、【2】超高齢社会／人口減少時代における老いをめぐる社会構想の編成などについて解明することを目的とする。

具体的には、【1】として、戦後日本社会における高齢者政策を含めた社会政策を広範に読み解くことを通じて、かつて「地域間再配分」や「世代間再配分」が実質的な「所得間再配分」「階層間再配分」となり得ていたが、それが困難を迎えていることを提示する。

次いで【2】として、今日のような「ポスト経済成長時代」「超高齢社会／人口減少社会」「労働力減少」の社会にあっては、「経済成長」「人口増加」「労働力維持」を前提になり立っていた「戦後日本型生存保障システム」が綻びを見せながらもかろうじて保たれてしまうこと、そのことによって各種の問題が生じていることを解明する。

最後に【3】として、戦後日本社会における高齢者政策の歴史の知見を踏まえつつ、1970 年代以降における高齢者政策（医療・年金・福祉・税制…）に対する批判的言説を精査した上で、「社会実践的な知」の時代精神が形成されながらも「社会構想の知」、とりわけ「分配に関する社会構想」が失われていく時代精神を解明する。

３．研究の方法

本研究の計画・方法は、前述の通り、【1】高齢者政策の緻密な解読を通じて戦後日本型生存保障システムがどのように変容してきたのかを解明すること――少子高齢化・超高齢化・人口減少のもとでの戦後日本型生存保障システムの変容の解明――、【2】高齢者を含んだ親子間関係・家族間関係・世代間関係がどのように変容してきたのか、それはどのような親子間・家族間・世代間の資源移転や負担を通じて形成されてきたのかを考究すること――世代間関係に関する考究――、【3】現在の制度や政策はいかなる社会構想のもとで設計されたのか、それはいかなる思考的限界を内在したものであるのかを論考すること――老いをめぐる社会構想の時代精神に関する論考――の 3 つの主題を通じて、「現代社会における老いをめぐる社会構想の編成」を提示することである。その具体的な方法としては、全体網羅的な文献研究と同時に、インテンシヴなフィールドワークを通じた質的分析を組み合わせることによって解明していくものである。

４．研究成果

極めて乱暴にまとめると、本研究を通じて、「現代社会における老いをめぐる社会構想の編成」とは、【1】主として 1960 年代における日本型雇用システムの完成、そして 1970 年代以降において進められた「都市→地方」の地域間再配分と「若者→高齢者」の世代間再配分を中心とする生存保障システムによって人びとの生活・生存は保障されてきたが、1990 年代後半以降になるとこのような戦後日本型生存保障システムが綻びを見せながらも、奇妙にも維持されていく中で、【2】今日の親子間・家族間・世代間関係が形成されていることを解明した。加えて、【3】1970 年代以降の少子高齢化の進展において、更には 2000 年代以降の超高齢化／人口減少化の只中にあって「社会的実践の思想」はさまざまに紡ぎ出されているにもかかわらず、「社会構想の思想」、とりわけ連帯・分配を志向する「社会的なるもの」の思想が急速にやせ細っていくことを解明したものである。

上記の発見に関する具体的成果としては、「５．主な発表論文等」に記したように、この科学研究費が採択された 2008 年 4 月以降でも雑誌論文 20 件、学会発表 15 件、図書 10 件以上（単著 1 冊、共著・分担執筆 10 冊）であり、極めて生産的にその成果を公表する

ことに成功をしてきており、当初の計画を遥かに凌ぐ進展を見せている。

その他にも、5 年間で書評・シンポジウム記録・その他が 20 本以上にもなり、この 4 年間にて圧倒的な成果をおさめることができた。特に、目的に即した形で成果をまとめることができており、飛躍的な研究の展開を示すことができた。

上記のことからも当初の計画以上に進展していると判断・評価することができる。

その理由として、第一に、当初の研究計画を超える研究の展開を示すことができていること、第二に、雑誌論文・学会発表・著書のいずれにおいても当初の予測を上回る数の成果をまとめることができていること、第三に、その成果は所属学会等に対してのみ発表しているだけではなく、中央大学での研究プロジェクトならびに国内外の研究者ネットワークで形成している国際研究プロジェクトにおける成果としても広く発表・公開してきており、国際的水準に達するための更なる研究展開を示すことが可能になっていること、第四に、個人の研究として着実かつ発展的に研究を継続すると同時に、それらの成果を共同プロジェクトの研究会等にて報告することによって飛躍的に研究の質を向上することができつつあることが挙げられる。今後も上記を踏まえて更に研究を発展的に展開していく予定である。

今後の研究の推進方策としては、引き続き現在の達成状況を踏まえて進めていくこと、雑誌論文・学会発表・著書のいずれにおいても更に多数の成果を示していくこと、国際研究プロジェクトでの活動と連動する形で、その成果を国際的に発信していくこと、今後も共同プロジェクトの研究会等の場にて報告することを通じて飛躍的に研究の質を向上させていくこと、などによって更に研究を推進させていく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

①天田城介、「老いらくの自殺」『現代思想』第 41 巻 7 号、98-109、2014 年、査読なし.

②天田城介、「水膨れしていく精神医療市場――幸福な奴隷の幸せを感受する世界を生きる支援を受容してしまうこと」『現代思想』第 42 巻 12 号、107-121、2015 年、査読なし.

③天田城介、「認知症新時代における排除と包摂――小澤勲の認知症論の位置」『現代思想』第 43 巻 4 号、212-230、2015 年、査読なし.

④天田城介、「当事者主義をめぐる社会学――その社会を診断する」『社会学年報』56 巻、35-46、2015 年、査読なし。

⑤天田城介、「男がケアするということ――社会関係のメンテナンスコストのジェンダー非対称性をめぐって『現代女性とキャリア』第 7 巻、3-33、2015 年、査読なし.

⑥天田城介、「ケアと労働――「ケアする権利」をめぐって」一般社団法人生活経済政策研究所発行『生活経済政策』2015 年 8 月号、24-27、2015 年.

⑦天田城介、「超高齢化社会・人口減少社会論――地方から見るケア労働市場の変容」『TASC MONTHLY』No.479、14-22、2015 年.

⑧天田城介、「「超高齢社会／人口減社会」からの発想――「戦後＝経済成長を背景に豊かで平和が保たれた社会」を問う」『月刊 MOKU』2016 年 1 月号、71-73、2016 年.

⑨天田城介、「無届施設のリアルが投げかけるもの――超高齢化／人口減少社会における社会構想」『現代思想』第 44 巻 3 号、70-79、2016 年.

⑩天田城介、「他者による「認知症の人の世界と言葉」のレシピの楽しみ方」永田久美子監修『認知症の人たちの小さくて大きなひと言――私の声が見えますか？』株式会社 harunosora、160、2015 年.

⑪天田城介、「どっちつかずの人たち――〈老い衰えゆくこと〉から社会を見る」『談』No.107、61-84、2016 年.

⑫天田城介、「成り上がりユダヤ人中産階級の自己意識を土台にした社会理論／エスノグラフィー――自らの悲劇に対する冷徹でアイロニカルな社会学的態度という自由」『現代思想』第 45 巻 6 号、85-99、2017 年.

⑬天田城介、「専門家による家族への介入をめぐる社会学」『家族社会学研究』第 28 巻第 2 号、73-77、2017 年.

⑭天田城介、「〈社会的なもの〉の社会学的忘却」『現代思想』第 46 巻 6 号、70-76、2018 年.

⑮天田城介、「問いを立てることの本質」『紀要立教社会福祉研究』第 38 号、7-8、2018 年.

〔学会発表〕（計 15 件）

①天田城介、「当事者主義をめぐる社会学――その社会を診断する」第 66 回早稲田社会学会大会シンポジウム「当事者主義の現在」（招待講演）、2014 年 07 月 05 日、早稲田大学戸山キャンパス（東京都）.

②Josuke AMADA. “Sociological Inquiry into the Theory of Modernization in Japan”, XVIII ISA World Congress of Sociology, Yokohama, Research, Committees 16（Sociological Theory）session, 2014 年 07 月 16 日, パシフィコ横浜（神奈川県）.

③天田城介、「男がケアするということ――ケア・労働・ジェンダー」日本女子大学現代女性キャリア研究所主催シンポジウム「男性がケアを抱えるとき」（招待講演）、2014

年 12 月 13 日、日本女子大学（東京都）.
④天田城介、「戦後超高齢化社会論」、日本保健医療社会学会 2015 年度第 1 回定例研究会（招待講演）、2015 年 9 月 28 日、大阪市立大学文化交流センター（大阪府）.
⑤天田城介、「境界に立つ研究者たちの研究倫理をめぐる葛藤と構造的ジレンマ」第 27 回日本生命倫理学会年次大会（学会企画シンポジウム「人文社会科学系の研究倫理」）、2015 年 11 月 29 日、千葉大学（千葉県）.
⑥天田城介、「専門家による家族への介入をめぐる社会学」、日本家族社会学会第 26 回大会シンポジウム（招待講演）、2016 年 9 月 11 日、早稲田大学戸山キャンパス（東京都）.
⑦天田城介、「この 4 半世紀における認知症当事者と家族・介護者とのコミュニケーションと生存の変容」、東京大学高齢社会創造研究機構主催講演会（招待講演）、2017 年 2 月 27 日、東京大学本郷キャンパス（東京都）.

〔図書〕（計 10 件）
①天田城介・渡辺克典編『大震災の生存学』青弓社、2015 年、全 224 頁.
②天田城介.「学会における査読システムの合理性」須田木綿子・鎮目真人・西野理子・樫田美雄編『研究道――学的探求の道案内』東信堂：262-279、2014 年.
③天田城介、「当事者の声を聞く」という方法とその含意」福祉社会学会編『福祉社会学ハンドブック――現代を読み解く 98 の論点』中央法規出版、218-219、2014 年.
④天田城介、「社会サービスとしてのケア――シンプルな社会設計こそが社会サービスを機能させる」庄司洋子編『親密性の福祉社会学――ケアが織りなす関係』東京大学出版会、245-263、2014 年.
⑤天田城介、「やりとりする／ケアする」栗原彬編『人間学』世織書房、2015 年.
⑥天田城介、「専門的サービスモデルへの収まらなさこそが極限状況を招く」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン――やりとりの秩序の社会学』新曜社、188-216、2015 年.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
天田城介ホームページ
http://www.josukeamada.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
天田城介（AMADA　JOSUKE）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：70328998